



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	おわりに
Author(s)	山村, 高淑
Citation	CATS 叢書, 11, 379-380
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66652
Type	other
File Information	CATS11_50.pdf



おわりに

山村 高淑

北海道大学観光学高等研究センター 教授

今回編者のひとりとして、本叢書の編集に携わらせていただいたことに、まずはこの場を借りて心から感謝申し上げます。専攻立ち上げにご尽力いただいた諸先輩方から、本専攻で博士号を取得され学界の第一線で活躍されている気鋭の若手研究者の皆さんまで、本当に多様で刺激的な論考をご寄稿頂きました。著者の皆様ひとりひとりの、深く広い思索の旅の記録が、専攻の10年間を濃縮するようなかたちでこの一冊に刻まれていると思うと、ただただ感慨無量です。

そして改めて確信したことがあります。この多様性こそが、そして多様性を尊重しあう風土こそが、創造性を生む原動力なのです。自ら理解できない相手の思想を、批判・非難することは簡単です。しかし、それでは何も生まれません。そうではなく、非難をする前に、相手に興味と敬意を持ち、なぜ相手はそう考えるのか、なぜそんなことを思いつくのか、想像力を働かせることなのです。すると相手との関係性は劇的に変わります。自分の中の考えもそれに触発されて、新たな光を放ち始めます。

本叢書を、文章の寄せ集めで、論点がばらばらだと批判することは簡単です。しかしそのばらばらさこそが、そしてばらばらさを許容しお互いに尊重する風土こそが、わたしたちの専攻の素晴らしさなのです。本叢書は、そのことをあらためて私に気付かせてくれました。

誤解を恐れずに言えば、観光研究に課せられた極めて重要な現在の使命のひとつは、他者・異文化との接合面をフィールドとし、他者・異文化との接触を、多様な価値観の尊重へと導くための仕組みを探ることに他なりません。だからこそ、観光創造専攻に学ぶわたしたちは、その学問的アプローチの根底に、多様性と寛容性の双方をゆるぎなく持ち合わせているはずであり、またそうあるべきなのです。そしてさらに、異文化に対する敬意を持ち、人間と文化に対する深い洞察力と、「もし自分が相手の立場だったら」という想像力を育む必要があるのです。

他者・異文化との接触を、「反発・拒絶」「無関心」ではなく、如何にして「対話・交流」へと導くことができるのか。グローバル化、ボーダレス化が進む中、この命題はますます重みを増すばかりです。わたしたちの専攻が築いてきたものが、微力ながらもこうした課

題の解決に貢献できるものであればと思います。

我が国の大学ならびに大学教育は大きな過渡期にあります。そんな中でのこの 10 年間、教員、院生は、観光創造という全く新しい教育・研究のあり方を一緒に模索し、悩み、笑い、泣いてきました。それは決して誇張ではありません。

そして、個人的な感想になるのですが、この 10 年間を思うとき、私の頭には寺山修司の次の言葉が浮かぶのです。

「大学は死ぬべきだ、と思う。そして真に『大学的なるもの』こそ息をふきかえすべきである」(— ぼくが戦場に行くとき —)。

観光創造専攻の 10 年間は、真に『大学的なるもの』の模索の 10 年であったと思いたいし、これからもその模索が続くものと信じたい。そう感じています。

最後に、10 年間にわたり寄附講座をご提供くださった、東日本旅客鉄道株式会社様、北海道旅客鉄道株式会社様に厚く御礼申し上げます。寄附講座が作り上げた教育研究の体系は、専攻そして学院の宝です。本当に有難うございました。

また、本叢書の編集・刊行にあたり、田代亜紀子先生、八百板季穂先生、張慶在君には多大なるご尽力を頂きました。お三方のお力なくして本叢書の刊行は叶いませんでした。記して感謝の意を表します。

2017 年 2 月 13 日